



# 『気象学者 増田善信 信念に生きた101年』

著・小山美砂

本の泉社 2000円＋税

本書は本人の語り調で書かれた自叙伝である。ジャーナリストの小山美砂さんと市民活動で増田さんを支えた権上かおるさんの2人が聞き取りや執筆を担って完成した労作である。何人分の人生を生きたのかと驚かされるくらい挑戦的かつ献身的な生涯がつづられている。

1、2章は、丹後の農家で生まれ、気象の道に進む経緯が記されている。宮津測候所への就職を契機に19歳で東京の気象技術官養成所に入り、海洋気象台を創設した岡田武松教官との出会いが研究

者としての財産となった。同教官から学んだ「確固たる学問的基礎のうえに世の中に役に立つこと」はその後の増田さんの一貫した信念となった。3、4章では、敗戦を経験したあとの「思想の転換」と民主的研究者として

定に加わり「核の冬」を研究するなど、気象学の面から反核運動に取り組んだ。コンピュータが気象予報に導入された時代だったが「コンピュータは道具である」「観察と発想をおろそかにするな」は現代に対する警告でも

## “代”のため人のために

を警告して

いた。

最後に、

モットーと

ある。一方、労働組合委員長として過酷な離島の気象労働者の人権と生活を守るべく奮闘する様子に人間らしさが垣間見える。5、6章では、気象学を社会のために役立てた定年後の40年間の描かれて

いる。「黒い雨」の区域を綿密な聞き取り調査により「増田雨域」として修正し住民勝訴に導いた。酸性雨など市民とともに環境問題に取り組んだ。スリーマイル島やチェルノビルの事故調査を行い、日本の原発の危険性を警告して

である。

(前田耕治・京都工芸繊維大学教授)